

岐阜分室便り「長州藩の治水工事」

前岐阜分室長 大河内 八郎*

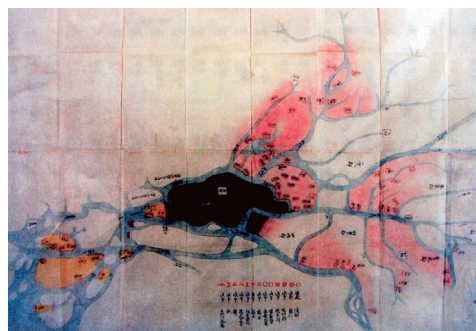
美濃の国は木曾三川より生まれ、川とともに生きてきた。今私がある分室も嘗て長良川が流れ、事務所から100mも歩けば長良川の51.4kmの左岸堤防に出られます。そこにはポケットパークがあり、今、桜が満開を迎え木の下には長州藩士治水顕彰碑が立っています。



この地域は、木曾三川の豊かな流れが肥沃な土地を作り、稲作作りが盛んに行われ人々の生活を支えてきました。美濃の人々は、川との闘いが自分たちの生活であり、壮大なドラマを展開し今日に至っています。この地方の最近の災害は、平成14年根尾川、12年東海豪雨、昭和58年美濃加茂、51年の長良川堤、50年揖斐川と計画を上回る洪水が発生しています。ハイテクを駆使し災害を防止している現代でもまだ災害を避けることが出来ないのです。ましてや人力以外に頼ることのできなかつた江戸時代の治水対策には並々ならぬ努力がなされ、水との戦いがこの地において繰り広げられてきました。濃尾平野は東に高く西に低くなっている地形で、洪水は西の揖斐川から始まり、揖斐川四刻、長良川八刻、木曾川十二刻と洪水がずれ、川はこの低平地を縦横無尽に流れ、西濃地区の人々は木曾川長良川の逆流を受け長時間洪水と戦わざるを得ませんでした。人々は、この地方独特の輪中堤を作り生命財産を守ってきましたが、幾度となく破堤し生活を奪われてきました。民百姓はこの惨状を幕府に訴え、三川分流の治水対策を幾度となく願い出しましたが、地元大名では到底出来るものでなく幕府は諸大名にお手伝い普請をさせています。このお手伝い普請は木曾三川で16回実施され、大名の数は71藩（1747～1861）を数えています。中でも宝暦治水工事（薩摩藩）は規模の大きさから多くの記録が残されその偉業をたたえられ祭

られています。宝暦の治水工事後十年余の明和の治水工事（長州藩）もまた壮大な事業が行われているにもかかわらず記録は残っていません。この長州藩士の功績に岐阜県民を代表して知事が長州藩士治水顕彰碑を建立しました。その碑には「本県は木曾川、長良川、揖斐川の三大河川をはじめ200余の河川、網の目のごとく、このため暦年水禍に悩まされて来た、幕府は明和三年（1766）、文化三年（1820）長州藩（山口県）に対し本県治水のお手伝い普請を命じた、第一回には多数の長州藩士が派遣され、延べ70里（280キロ）工事現場は、方県郡正木村（岐阜市）など1000余ヶ所二ヶ月に及ぶ大工事となり、第二回は、お手伝い普請の分担金四万両を越え、このため長く長州藩の財政を逼迫することとなった。ここに深くその功績をたたえ県民謝恩の顕彰碑を作る」昭和44年秋 平野知事とありますが一般県民市民には広く知られていません。

この度、木曾川上流河川事務所で、長州支藩岩国藩の吉川家文書資料にこの治水工事の件が残されているものを見つけ、その解明作業を岐阜女子大学地域文化研究所の丸山幸太郎先生に依頼し、「長州藩・岩国藩・小浜藩による木曾三川明和の治水の概要」を取りまとめられました。長州藩士の工事区間は岐



長州藩御手伝普請所絵図（山口県立文書館所蔵）

阜市から桑名に至る全川工事で実施され薩摩藩が行った宝暦治水の修復工事も行っています。その経費は弱小藩ゆえ、藩財政の年間予算を消費するもので薩摩藩の負担度を超えるものであったと記されています。今回の治水工事は、宝暦治水の問題点の改善が行われ、藩士千名を越える工事で犠牲者を出さなく実施できたことは関係者の工夫や努力そして地元調整が行われた結果といえるもので、是非長州藩士の功績を知って頂きたく関係資料を参照し作りしました。

※)現 株式会社 建設技術研究所